

猪瀬浩平(著)、森田友希(写真)『分解者たち—見沼田んぼのほとりを生きる』

(2019 生活書院)

石 井 美 保

(京都大学准教授)

黒い土をスコップで慎重に掘り進めると、薄赤い色の、不恰好な塊が少しずつ姿をあらわす。一緒に掘っている娘が歓声をあげる。ずっしりとした芋の房。この畑は大阪府の北端にある私の実家の裏手にあるのだが、いまその家には誰も住んでいない。かつては広々とした水田と畑と雑木林に囲まれていた家は今や、新興住宅地と高速道路、関西電力の用地に囲まれている。私たちがろくに世話もしていないのにこの畑で芋やかぼちゃが収穫できるのは、近所の人々が「自分とこのついでに」といって、何くれとなく世話をしてくれているからだ。ミミズやダンゴムシがあたふたと逃げまわる畝にかがみこんで芋を掘りだしながら、私は猪瀬さんの本のことを考えていた。彼が描いた、見沼田んぼの農園のことを。その規模や歴史は違うけれど、ここもまた、大都市からの通勤圏として高度経済成長期に開発されていく中で著しくその景観を変え、それでも地べたに根づいた人びとの営みとつながりによってパッチ状に生き延び、今なおその恵みを通して私たちに驚きと喜びと気づきを与えつづける、そんな土地のひとつなのだった。

猪瀬さん(以下、「著者」)の著書である『分解者たち』の舞台は埼玉県南部にある見沼田んぼだ。高度経済成長期の乱開発の中であって、そこは辛くも開発を免れ、農的緑地空間として残された。

見沼田んぼが緑地空間として残されたことの背景には、この土地がもつ治水機能への期待、地権者の要求と都市住民による保全運動のせめぎあい、時の行政の政治的判断などが複雑に絡まりあっているのだが、著者は見沼田んぼをめぐる地域史として、それらの絡みあいと展開を丹念に追っていく。ただし、彼はそれを市民や行政による見沼田んぼの「保全の歴史」として描こうとするのではない。そうではなく、肥大化していく首都圏に食料と労働力という「栄養」を供給する一方で首都圏の「排泄物」を受け入れつづけ、それによって疲弊しながらもたゆまぬ「分解」によってみずからを蘇生させていく有機的な大地とそこに生きるものたちの地域史として、同時にまた、顔をもった一人ひとりの生活史として、見沼田んぼの歴史をその内側から描こうとするのである。著者の描く見沼田んぼはだから、人や生きものや沼沢や森が息づき、うごめき、伸び縮みする、それ自体が巨大な有機体のようなのだ。彼はそこに生きるものたちのうごめきと息づかいを、アカデミズムや運動の言葉で描くのではなく、あくまで生活者の言葉で描きだそうとする。

戦後の高度経済成長期、首都圏近郊の農村地帯は、際限もなく増大していく都市の欲望を下支えするために、農産物や労働力の供給源として、同時に都市が排出する廃棄物の処理場としての末端

的機能を担わされていった。なかでも1960年代以降の化学肥料の導入によって、それまでは資源循環の中にあった生ゴミやし尿は市場の外部に廃棄され、もはや分解できないゴミとして埋め立てられるようになる。それは同時に、それまで地域共同体の中に含みこまれ、さまざまな役割を担ってきた障害者や老人が「役立たず」として排除され、隔離されていく過程でもあった。近代化とともに地域や家庭での役割を失い、ただ座っていることを意味する「つぐみ部屋」に押し込められ、やがて1970年代末に地域福祉の改善をめざす「わらじの会」との出会いを通して街に出ていくことになる新坂光子さんと幸子さんの姉妹も、そうした人びとの一員であった。

土地投機ブームが始まる1980年代になると、見沼田んぼの開発計画が浮上する。だが、この計画は都市住民の反対運動と農家の要望、行政の思惑がせめぎあう中で転換を余儀なくされ、1990年代には公有地化推進事業によって見沼田んぼは農的緑地として保全されることになる。著者が活動の拠点としてきた見沼田んぼ福祉農園は、こうした経緯の中で1999年に開園した。この開園に至るまでの運動と政治と親交の絡まりあいを、著者は丹念に解きほぐしていく。その作業を通して明らかにされるのは、見沼田んぼの保全運動と地域の障害者運動との出会いと連携、重なりあいの歴史だ。実のところ著者は、物心ついた頃から当事者の家族としてその渦中に巻きこまれていた。

著者とその家族が関わってきた運動のマイルストーンとして描かれるのは、1988年、小学四年生だった著者が両親と兄とともに経験した、埼玉県庁知事応接室での四日間にもわたる泊まり込みと直接交渉である。障害をもつ著者の兄は、地元の小中学校に通い、高校も地元の公立校への進学を希望していた。だが、兄が受験した高校は入学者数が定員に達していないにもかかわらず、彼の入学を拒みつつける。著者の両親は、どの生徒もはじ

めから差別されることなく地域の学校に通えるという「あたりまえのこと」を実現するための運動をはじめた。この運動はやがて、県立定時制高校への入学を求める子どもたちとその家族、運動に賛同する大人の障害者とその支援者たちが連携して知事応接室を占拠し、ともに声をあげるという出来事につながっていく。

「障害のある子は養護学校へ」という行政や他の保護者たちからの圧力に耐え、自分を落とした高校に自主登校する我が子に付き添い、校門の前でビラを配り、「あたりまえにみんなといっしょに」と訴えつつける親たちの姿は、読む者の胸を打つ。彼ら・彼女らが求めているのは、はじめから「普通」や「障害」といったカテゴリーに分けられた上での交流や共生ではなく、多様な子どもたちや大人たちがそのまま一緒に生きていくこと、互いに混じりあい、影響を与えあい、ともに何かやっていくという、真の意味での共生の実現だ。本書における「分解」という言葉の意味も、おそらくはそこにある。表面的なクリーンさや同質性を守るために異質なものを排除し、隔離するのではなく、雑多な存在が混ざりあって何かを生みだしていく、その混沌やエネルギーを呑みこむように受け入れること。

同時にまた、共生と共育を目指す運動をめぐる著者の記述は、私にとってさまざまな記憶と感情を、ある種の居心地の悪さとともに喚起するものでもあった。1973年生まれの子の著者の兄と私は同い年で、だから完全に同時代を生きてきたといえるにもかかわらず、おそらく各地で展開されていたはずの共生共育運動について、本書を読むまでまったく知らなかったこと。あるいはまた、親しい友人のひとりが、娘さんが小学校に入学するにあたって普通学級を希望していたにもかかわらず、学校長に特別支援学級を勧められたと語っていたこと。さらにまた、長女が地元の公立中学校に進学した時、小学校で同学年だった特別支援学

級の子どもたちの顔が見当たらず、その子たちは遠くの学校に通うことになったと聞いたこと…。そうした事柄の根底にある問題を、私は自分には関係のないこととして等閑視してきたのではなかったか。本書の記述は、ある痛みをもってそのことに気づかせると同時に、読み手自身が自分の暮らす地域を耕し、わずかなりとも「分解」していくよう促す。

見沼田んぼをめぐる地域史であり、そこに生きる人びとの生活史でもある本書の放つエネルギーは、本書に登場する個性的な人びとの放つ生命力そのものだ。「つぐみ部屋」から街に出た光子さんと幸子さん姉妹、「わらじの会」の古参メンバーである藤崎さんと橋本さん、そして著者自身の兄と両親。それぞれのありようを描くとき、著者は各人の言葉やエピソードから立ち上がってくる存在の独特さだけでなく、言葉では表現しきれない身体の圧倒的な存在感に目をむける。それはたとえば、障害をもつ人の聞き取りづらい言葉であり、うめき声であり、その身体の重量であり、において、熱でもある。はじめから「聞き取れない」ものとして無視されてきた言葉と声、「見たくない」ものとして隠されてきた身体のがんが読手を圧倒するのは、少年だった頃の著者自身がそれらに圧倒され、戸惑いを覚えた、その感覚がのりうつってくるからだろう。そうした身体が放つ力に相対するためには、知事応接室での教育長のようにうろたえるばかりではなく、あるいは論理的な言葉で対峙しようとするのでもなく、互いの差異に注意を払いながらもおおらかにつながろうとする身構えが必要だ。どんなに切迫した状況にあっても、あくまで明るくユーモアをたたえた言葉で綴られる著者の母のレポートは、その理想形を体現しているようにみえる。本書の中に引用されている彼女の文章は私に、長女と次女が通っていた保育園の先生たち——彼女らもまた、子どもたちにとっての「あたりまえの生活」を守るため

の運動の担い手だった——の綴る『園だより』の文章を思いださせた。

この運動の中に立ち現れてくる、差異と個性をもったそれぞれの身体の重み、かかわりあいの中でこそ親しみと深みを増してくる声や叫び、においや熱の重要性は、7章で取り上げられる津久井やまゆり園事件をめぐる著者の省察の中心をなすものでもある。生きている身体そのものの重みに立ち戻る。それは常に明晰で論理的な言葉だけを重視し、それ以外のものを周辺に追いやった上で排除の事実を忘れ、はじめから「なかったもの」とするようなシステムや思考のあり方を根本から問いなおすことだ。

見沼田んぼの周辺地域と同様に、肥大化していく都市を支えるために開発された相模湖周辺の歴史を労働者の視点から辿りなおし、あるいは見沼田んぼの中にある朝鮮学校の人びとと交流しながらその立地の意味を問いなおすとき、その作業は近代化していく日本の「正史」が取りこぼしてきた「稗史」の領域に光をあてることを意味する。そこには、表舞台にはけっして現れてこないものたちの語りや声、生きている身体が配がある。それらの存在は周囲の人間や生きものや土地との絡みあいの中にあり、だからこそ「正史」を支配する者たちに翻弄されながらもしぶとく生き残り、独特な存在感を放ちつづける。

容易には同質化されようのない、それぞれの差異と個性をもつ人たちがそのまま一緒にいること。互いの生活の場である土地をともに気にかけて、そこでひとときを過ごすというシンプルな営みを通してつながりあうこと。本書で著者が提起するのは、差異や分断をはじめから「なかったこと」にするのではなく、あるいは個々人が努力して乗り越えようとするのでもなく、雑多なものたちが雑多なままに地べたで出会い、混ざりあい、その過程を通して変化していくことの全体を、その把握しがたさや混乱や葛藤をも含めて肯定する思想

だ。著者のいう「分解」はだから、個人がひとりで行う実践なのではなく、さまざまな人間たちと生きものたちと彼らの生きる大地との、混沌とした共同作業としてしかありえない。

本書は、そうやって「正史」から取りこぼされ、地べたにうごめくものたちの声を聴き、記録することから生まれる地熱のようなエネルギーに満ちている。その意味で本書は、現代日本の民族誌、というより民俗誌であるようにみえる。著者が人びとの語りや行為を単に記録するだけではなく、地域の歴史と運動史と生活史をつなぎ、さまざまなトーンをもった声や叫び、身体の重みや熱を含めて見沼田んぼとそこに生きるものたちの民俗誌を記述しえたこと。それは、本書に登場する人たちとの生活やつながりや運動の中に否応なく巻きこまれ、そこから一旦身を引きはがしながら、またその中に戻ってきたという著者自身の人生の軌跡と切り離しえないものであっただろう。そしてまた、そうした書き手に著者がなりえたことで、絶えず流れつづける川の中の小石のように、忘れ去られていくささやかな出来事や記憶をとどめ、流れの中に小さな渦をつくりだす、そんな本書が生みだされたこと。それは著者のいうように、どんなに平凡でつまらないように思われる場所にあってもきっと起きるにちがいない、必然的な奇跡のひとつであるように思われる。